大田原文学サロン報告

「映像と文学」をテーマに講演と対談

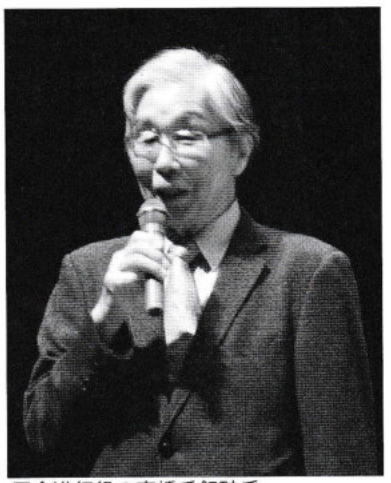
毎年恒例の大田原市文学サロンが、16年10月22日（土）14時から大田原市・那須野が原ハーモニーホールで開催された。

この文学サロンは02年3月に日本ペンクラブが「平和の日」那須の集いを開催したのをきっかけに、毎年、大田原市と日本ペンクラブが共催して行っているもので、第14回目となる今回のテーマは「映像と文学」。

第1部は「映画に人生を引きずられて」と題して作家の志茂田景樹氏が講演を、第2部は岩崎雅典氏と山本晋也氏の両映画監督が「映像と文学」について語り合った。司会進行役は1・2部ともに高橋千劒破常務理事。

主催者を代表して津久井富雄大田原市長が「最近、本を読む人が非常に少なくなっていると言われています。その一方で、映像から入っている影響力には大変大きなものがあります。今回は『映像と文学』というテーマで、多くの子どもたちに読み聞かせ活動をなさっている志茂田先生の講演と、映画界を代表する岩崎、山本両先生の『監督対談』を十分、堪能していただければ」と歓迎のあいさつを述べた。

あいさつをする津久井富雄氏



司会進行役の高橋千劒破氏

第1部　講演「映画に人生を引きずられて」

志茂田景樹

■戦死した兄にカタカナを学んだ

映画は今も僕の人生を引きずっています。僕には15歳上の兄がいました。昭和20年8月、僕が5歳の時に戦死しました。その兄が兵隊にとられて戦地へ行く前、僕にカタカナを教えてくれました。当時、国鉄の官舎に住んでいました。木造の平屋で、廊下にガラス戸がありました。透明なガラスで、兄が、外との温度差で曇ったガラスに字を書いて教えてくれました。はじめはカタカナからで、兄は「ア」と書いて、「あ」と発音します。僕も兄と同じように「ア」と書いて、「あ」と発音します。それを何回か繰り返して、「イ」に移ります。それが終わると「ウ」というように、カタカナの文字をすべて教えてもらいました。ひらがなも同じです。しかし、ひらがなを全部、教えきれないうちに兄は兵隊に行きました。

8・15「敗戦」のちょっと前の8月7日、ソ連は一方的に「日ソ不可侵条約」を破って、ソ満国境を越えて、進撃を開始。精鋭100万人と言われた関東軍は満州の荒野をさまよいながら、敗退していく。その時に兄は戦死したらしいのです。

残された兄の本棚の中に若山牧水、北原白秋、石川啄木などの作品がありました。昭和21年に小学校に入った僕は、学校から帰ると本棚から詩集

を取り出しました。ページをめくると、兄の声が聞こえてくるのです。もちろん、小学1年生だし、漢字も難しいし、読めはしませんでしたけれども……。

兄を忍びながらページを繰くるだけで、何か伝わることがありました。「兄ちゃん、残りの『ひらがな』の字を学校に入ってちゃんと覚えたよ」と、そんなことを語りかけるときもありました。兄の本棚から、兄の思い出とともに文学の香りみたいなものをもらったような気がします。ところが、小学5、6年生になると、小説なども読むようになりましたけれども、途中から映画の方にいっちゃいました。

■「ターザン」に始まる映画遍歴

最初、母は「ターザン」という映画に連れて行ってくれました。密林のジャングルの中の蔓草が印象に残っています。そのあと、母はいろんな映画に連れて行ってくれました。一人で映画を観るようになったのは中学生になってからです。中間試験や期末試験が終わると、映画を観に行くのが日課になりました。

新聞の映画館広告に、若尾文子出演の「十代の性典」がありました。今の映画からすると刺激は少なかったけれども、当時の中学生としてはとても刺激的でした。

そうした中で、いまだに忘れられないのはガラス越しのキスシーンです。透明なガラスにカタカナ、ひらがなを書いて、字を兄から教えてもらったからでしょうか。そのガラス越しのキスシーンというのが、とても印象に残っています。大きくなったら、ガラス越しのキスをやりたいと思いました。

話はちょっと飛びますが、おくての僕に学生時代、ガールフレンドができました。夕暮れ時、神宮外苑を散歩しました。ガラス越しのキスをしようと思っていました。しかし、散歩してもなかなか見つからない。ガラスの入った窓がありましたが、透明なガラスでなくて、白く濁った模様の入ったガラスでした。これじゃしようがないと思って、腕を組みながら散歩しているうちに、彼女の方からキスをしかけられたのです。ファーストキスは念願のガラス越しのキスではなかった。それがいまだに残念で残念で……。

映画が好きになっていましたから、都立国立（くにたち）高校に入学してから映画研究部に入りました。僕が入ったころの映研は潰れる寸前でしたが、映画の配給会社に行って映画のポスターとスチール写真を借りてきて、壁新聞を作りました。

そんな活動をしているうちに、ある時、武蔵野館の人と会いました。高校生の割引料金をもっと下げてくれませんかと頼みましたが、割引はできませんと首を横に振られました。そこで「武蔵野映画高校生連盟」という団体を発足させました。この団体は2年足らずでなくなってしまいましたが、割引料金よりもさらに安い料金で映画を観ることができたのです。

当時は、オードリー・ヘップバーン主演の「ローマの休日」など大作ものが多かったのですが、僕らが夢中になった映画は西部劇でした。

■石原裕次郎「嵐を呼ぶ男」に魅了されて

高校を卒業する頃になると、石原裕次郎が出てきます。「狂った果実」は爆発的な人気を得ました。高校を卒業して浪人時代に観たのが「嵐を呼ぶ男」です。

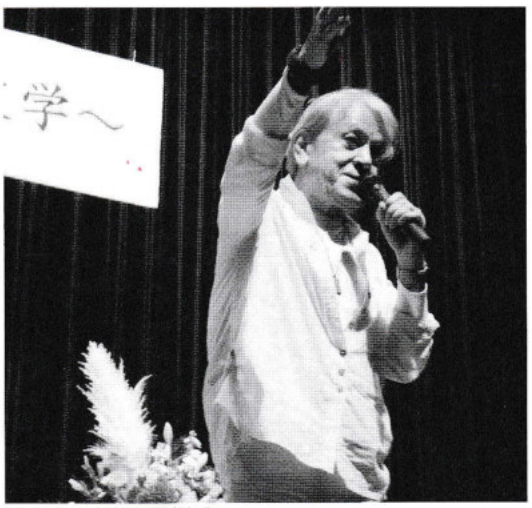
僕が作家になってから、ある雑誌に「印象に残る映画」についてエッセーを頼まれたことがあり、取り上げたのが「嵐を呼ぶ男」。石原裕次郎の敵役のドラーマーに扮した笈田敏夫さんです。この人がいなければ、こんなに当たらなかっただろう、すでに他界されていると書いたところ、実は他界されていなかった。本人から「私は生きています」と手紙が来て、謝りの手紙を書きました。それから何年か経って、その方から、自分のパーティーの招待券が来ました。出席したかったのですが、地方に講演があって行けませんでした。そういうエピソードも含めて、僕は映画からいろいろ学ぶことが多かったと思います。

一浪して中央大学に入ったのですが、当時、映画は全盛期でした。まだテレビが普及する前で、庶民の娯楽のナンバーワンでした。僕は石原裕次郎に憧れて銀幕スクリーンで活躍したいと、大学

に入りながらも、千駄ヶ谷にある俳優養成学校に通い、シナリオの書き方や演技の方法などを学びました。

そのうち、通行人などを演じるエキストラのアルバイトが入りました。学生にとっては、とてもいいアルバイトでした。指定された撮影場所に30分前に行って待機しているのですが、監督によっては2、3時間待たされることもありました。その間、出番が来るまで、マージャンをやったり、お酒を飲んだりしていたこともあります。箱根・芦ノ湖にロケに行ったこともあります。

エキストラの中から俳優になった人もいますが、僕は書類選考でいつもダメ。それでも俳優になりたくてエキストラを続けました。映画に対する期待もありました。たとえば、イングマール・ベルイマン監督のスウェーデン映画「処女の泉」などはよく分からないけれども、観終わっても何か深い感動が沸き上がってくるような映画でした。


講演する志茂田景樹氏

36歳で小説現代新人賞を受賞し、翌年から小説1本で食べていけるようになりました。その4年後に直木賞を受賞し、まもなく週刊誌に連載小説を書き始めました。それが「制覇」というタイトルで映画化されました。山口組3代目と松田組2代目との抗争事件です。製作会社の東映から僕に、「ぜひ、出演してくれ」と言われて、昔、スクリーンの中で活躍してみたいと描いた夢が実現したと思いました。親分の娘さんと新聞か週刊誌の記者が結婚する時の乾杯の音頭をとる役でした。

それから結構、特別出演や友情出演として映画に出たりしました。作家になっていたけれど、映像の世界は常に僕にとっては身近なものになっていました。テレビのバラエティー番組に出演するようになったのも、やはりスクリーンの中で活躍してみたいと思っていたからでしょうね。そういう意味で、映画は僕の人生そのものに強く色濃く影響を残しています。

■登場人物に自分自身を投影

最近はあまり映画館に足を運ばなくなってきました。それはどういうことかと言いますと、映画の配給会社が作る試写用DVDを自宅でも観られるからです。

僕は去年、DVDで映画を30本は観ています。しかし、映画はやはり劇場で観ないと、映画を観たという感じが出ません。今年は劇場で3本観ました。その3本目が『シン・ゴジラ』でした。

小説の感動と映画の感動はかなり重なる部分はありますが、いろんな映画を観ながら無意識に登場人物の誰かに自分自身を投影したり、自分を重ねたりしているところがあるのです。ですから映画を観て、主役よりも脇役の誰かにすごい印象が残っている場合もあります。

表現の世界というのは、どこかで僕たちそれぞれのもっている感情、そういうものが投影されているのだと思います。小説は活字で、映画は映像で表現する違いはありますけれども、僕は映画に人生を引きずられてきました。まだまだ引きずられていいと思います。映画だけでなく、活字の世界でも引きずられていきたいと思います。

今日、お集まりの皆さんも、活字はもちろんですけれども、映画の世界でも、きっとそういう自分を探すことができると思います。そのあたりを念頭に置かれて、活字でも映像でもいいですから、表現の世界にどんどん入っていっていただきたいことを最後の締めにして、僕の講演を終わらせていただきます。ご静聴、ありがとうございました。

（ここでいったん、志茂田さんは舞台の袖へ。しかし、時間がまだ10分間あるというので、再び

演台へ）

「すみません。まだ10分ありますね。僕は読み聞かせ活動もしています。普段は音楽とスクリーンを入れているのですが、今日はありませんので、言葉で語ります。皆さんは映像でイメージして、その世界を作るつもりで聞いてください。目を閉じて聞かれる方はそれでよし。目を開けて聞かれる方は、それでまたよし」と前置きして、自作の絵本『ぞうとこどもが　みた　ゆめ』の読み聞かせを実演。

「皆さんは今、アフリカ大陸にやって来ました。皆さんの目の前にどこまでも大草原が広がっています。大きな沼が見えます。その沼のほとりで、アフリカ象の群れが楽しそうに水遊びをしています。子どもの象同士が激しく水をかけ合って、大騒ぎしています。その群れから少し離れた木陰を見てください。とてもやさしそうなアフリカ象のお母さんと、とても可愛い子どもが体を寄せ合って、何か静かにうれしそうに話をしています」と、アフリカの大草原に生きる母子の象の物語を語り始める。

母象は、父象を亡くした子象に生きる勇気と知恵を与え、やがて夜空を上がっていって星になる。子象の「プッ、プッ。ビューン、ビューン」「ビュルーン」という鳴き声をまじえながらの熱演で、母象の子どもへのやさしさと愛の深さが聴衆に感動を与えた。

〈講師プロフィール〉

志茂田景樹（しもだ・かげき）１９４０年、静岡県生まれ。中央大学法学部卒業。作家、よい子に読み聞かせ隊隊長。76年、作家活動をスタート。読み聞かせ・講演会は１８００回に達する。著書は５００冊を超える。主な作品に『やっとこ探偵』（小説現代新人賞）、『黄色い牙』（直木賞）、『汽笛一声』（文芸大賞）、『キリンがくる日』（日本絵本賞読者賞）ほか多数。